

## よいウソと悪いウソ

校長 相川 保 敏



毎日のように紛争や戦争のニュースが流れています。停戦や休戦に向かう動きが報道

されることもあります。なかなか進みません。正しい情報が何なのかわからなくなることがよくあります。自分たちの都合のよい情報や相手を混乱させるフェイク=ウソを流していることも想像されます。自分たちの正義を強調し、相手を非難することで、仲間を鼓舞し団結力を高めることにつながると考えられますが、ウソによって問題が解決に向かうとは考えられません。

国内においても、ネット・SNSではフェイク=ウソが蔓延し、特に特殊詐欺の被害報道がされない日はないほどです。相手を貶めるようなウソが渦巻いてしまします。ウソを見抜き、犯罪に巻き込まれないようにしていく必要もあります。

脳科学者・中野信子氏は著書『フェイク ウソ、ニセに惑わされる人たちへ』の中で、今の世の中は「ウソ」や「フェイク」と共存する社会であると言っています。「人は10分に3回ウソをつく」という研究報告もあるそうです。ウソには誰かをコントロールしたり、傷つけたりする悪いウソもあれば、相手を不快にさせないためにつくウソもあると言っています。例えば、実生活において、髪型を変えた人に「前の方がよかった」と正直に思っても「似合ってますね」ということがあります。ウソという認識はほとんどなく、ウソをついていることもあるわけです。

中野氏は、世の中には悪いウソとよいウソがあり、正直であることはすべてよいわけでないと言っています。その上で、子どもたちにも「正直はよしとし、ウソはすべてダメと言って、ウソを使えない人に育ててしまうのではなく、よいウソと悪いウソ、そしてまた誤解を受ける正直さ、常に正直であることのリスクについても教え、それぞれ学んでいく必要があるのでは

ないか」と言っています。

学校教育では、「ウソ=悪、正直=善」であると教えます。ご家庭でも同様かと思えます。中野氏の言うように、「よいウソと悪いウソ」をうまく使い分けていくことを教えていくことは難しく、やはりこれから正直であることの大切さを説いていくと思えます。

実際に、学校で友達同士のトラブルが起こった際に問題をこじらせていくのがそれぞれの言い分が異なることです。「言った、言わない」「やった、やっていない」という状況が生じます。思い込みや誤解などで溝が深まっていきます。こうした誤解をうまく解きほぐしていくことで、解決に向かっていきます。しかし、時折、「叱られたくない」といった自己防衛等からウソをついてしまうこともあります。また、「褒められたい」「自分に注目してほしい」という思いから、ウソをついてしまうこともあります。そうした際に、なぜウソをついてしまったのか、その背景を想像して子どもたちに共感し、子どもたちの心を受け入れることで、子どもたちが正直である自分を表現しやすくしていくことが大切であると考えます。正直であることをほめ「誠実であること」の意義を体感させていきたいと考えます。

さて、今月の生活目標は、「相手のことも考えよう」です。子どもたちを取り囲む環境からは、悪いウソの情報が次から次へと飛び込んできます。こうした世の中ではありますが、やはり相手のことを考えた行動とともに、周りの人に対して正直であってほしいと願います。周りの大人が、誠実な姿勢・態度を子どもたちに見せていくこと、誠実であることの大切さ伝えていくことが必要であると考えます。ご理解とご協力をお願いいたします。

